

の議論も始まった。教室の名だたる大先輩の意見の交換と侃々諤々の議論の中、東洋での新しい発見にふさわしい名を考えるのは楽しかった。しばらくし

てホシツリモとシラタマモが誕生した。東洋ではじめての命名であり、はじめての属名となった。

(東京都世田谷区等々力7-22-4)

山田 家正：産学連携の視点から

日本藻類学会事務局から山田幸男先生ご生誕100年記念にあたっての原稿執筆の依頼を頂いた。泉下の先生も発展した学会の現状をさぞお慶びのことであろう。この企画を立案して下さった学会の御配慮に門下生の一人として厚く御礼を申し上げたい。私に対してのご依頼は非常に光栄ではあるものの、その応諾の答えを出すには少なからず逡巡した。それは、研究の現場や学会活動から長期間離れてしまっている今の私の立場では、その記事内容を学問的なこと、あるいは学会に関連することに置くのは困難であるからである。

日本藻類学会は1952年に設立されて初代会長が山田先生であったことから事務局は北大理学部植物分類が教室に置かれた。そのために、私もまだ大学院生であった1960年代初め頃から先輩の諸先生のご指導を頂きながら学会の仕事のお手伝いをした。それはそれなりに苦勞もあり思い出も多いが、むしろ、学会の仕組みや論文校正などを学ぶ得難い機会を与えて頂いたと思っている。その頃は学会設立時からすでに10年近く経過し、学会事務局の体制もある程度軌道にのっていた時期である。初期の藻類学会についての回想は、先輩の諸先生方をお願いするのが相応しい。私には、学会誌という科学の発展に寄与する紙面で改めて紹介するほどの材料は持ち合わせていない。そこで、視点を山田先生の大学人としての姿勢と、現在の大学の抱える課題の一つである社会における大学の役割についてを関連させて私の考えを述べることにしたい。

山田先生は藻類学という理学系基礎分野の大先輩であったが、基礎分野にとどまらず、産学連携の仕事をなさったと思っている。それもごく自然にである。

山田先生が戦前、戦後を通じて磯焼けの問題をはじめ、資源としての海藻の増養殖の問題などに直接、間接に関与されたことはよく知られている。先生は戦前から一貫して、水産科学領域の発展を考え、大学教員のみならず、水産研究所、水産試験場などで応用的、実践的な研究に従事する研究者達を世に送り出した。さ

らに、北海道文化財専門委員としてマリモの調査も担当され、その観光資源としての位置づけも踏まえておられた。また、内水面（淡水系）生物の資源管理にも委員として発言をされた。もちろん、卒業生の就職には人一倍配慮をされた先生にとって、水産関係は一つの就職先として考えておられたことも想像に難くないが、専門分野を通じて産業興隆に資するための視野は広がったと推察する。とりわけ有用海藻の産地の一つであった北海道においては、水産界と無縁であることは許されないことであつたと思われる。先生が1960年に北海道新聞文化賞、1964年に北海道文化賞を受賞された背景には、学術上の功績に加え、このような地域社会の発展に貢献されたという幅広い諸活動も評価されていたことがあつたと記憶している。

先生のこれらの幅広い活動は、先生の終生の恩師であった岡村金太郎先生が水産講習所（現在の東京水産大学）の教授、所長を務められたことと無関係ではなからう。さらには、1930年の北海道大学理学部の創設にあたって、当時東大の研究室におられた若き日の山田先生を植物分類学教室の教授として白羽の矢を立てた農学部の宮部金吾先生の影響も大きかったと想像する。よく知られるように、宮部先生は菌類学のみならずコンブ類の研究のパイオニアでもあつた。余談になるが、この教授候補選考にあつたの経緯については、山田先生ご自身によって詳細に語られており興味深い（山田幸男著、「わが海藻研究五十年」、昭和54年刊）。それによれば、宮部先生が東大理学部を訪問して、当時副手であつた山田先生に遠藤吉三郎先生の遺品である北海道産アイヌワカメ類の標本の説明をさせておいて、ひそかに人物評価をしていたことがわかる。札幌を菌類、藻類など隠花植物研究の中心地にしたという宮部先生の目は確かであつた。山田先生亡き後、先生のご長男の山田真弓北大名誉教授のご好意で、先生が大切にしておられた蔵書のうちから遠藤先生のアイヌワカメ属のモノグラフを頂戴した。私に

としては、上述の教授選考の逸話とともに忘れ難いことである。

話を元に戻し水産界との関わりについて重要なことを付け加えておきたい。海藻学の基礎的研究、特に分類学においては海藻の生活史の解明が大きな比重を占めており、その研究結果が有用海藻の増養殖技術の発展に直結することは周知の通りである。このことは、海藻学においては、その基礎的研究の成果が水産業の新たな進展に直ちに生かされるという産学連携のモデルの要素があることを示している。このような傾向は海藻学に限ったことではなく、理学系、農学、水産系でも第一次産業と関係深い分野では、基礎科学と生産現場が直結していることが多い。そしてそれは現在も同様である。山田先生が、ごく自然に産業界と大学の連携を推進した背景には、上述のような必然性が存在したことも大きな要因であったと考えられる。日本藻類学会の創設以来、会長として常に水産界からの会員参加を図っておられたことは、先生のそうした研究面における師となる人々の存在と産学連携の環境によって培われたものであったのではなからうか。このようなことから、先に述べたように、山田先生もごく自然に学の成果を産に生かす道につなげる努力をなさったと考えられる。

このように、理工系の分野では、理化学研究所の存在と活動で示されるように、研究者が産業の興隆に力を注ぐことは昔から自然の成り行きであったように思われる。しかし、戦後の大学では長期間にわたって、産業界と直接的なつながりを持つことにある種のアレルギーがあった。それは戦前に、時の政府により思想の弾圧があり、学問の自由が侵害されたことに対する反作用であった。それが大学では分野を問わず普遍的な傾向となり、利益を追求する企業とそれに結びつく権力と一線を画す方向が強かったのである。それがスタンフォード大学とシリコンバレーの関係などに刺激されて、漸く最近になって日本経済の低迷脱却には産学官の連携が不可欠であるとの共通認識が出来はじめてきた。大学自身が利益追求に走ることは戒めなければならないが、研究成果を積極的に社会に還元しなければならないとの共通認識は出来つつあるように思う。

私は、社会科学系大学の学長として9年目を迎えるが、この間、大学、とりわけ国民の税金で運営される国立大学の果たすべき責務とは何かを考える日々を過ごしてきた。その中で、基礎科学と応用科学、あるいは理工系と文科系という区分は研究者の役割分担としては存在するものの、研究者自身は常に総合的な視野

をもって、社会的課題を解決するために努力することが基本であることを痛感してきた。これは、ごく当たり前のことではあるが、現実には研究者の立場になると次第に視野が狭くなり、自分の研究がどのように社会に貢献するか、あるいは他の分野とどのように関係するのかについて殆ど意識しなくなることがある。それが結果的に蛸壺型と言われる研究者をつくり、さらには大学と社会の間に壁を築き、大学が社会と遊離した存在になる一つの要因になると思われる。特に、人文・社会科学系分野においてはその傾向が強い。

私の助手時代にキャンパスに吹き荒れた大学紛争は、結果的に破壊しか残さなかったが、その紛争の契機の一つには、研究者の社会的責務あるいは大学の役割とは何か、についての問いかけがあった。そしてそれが今また別な形で改めて問われていると思う。このような問題を私の育った研究環境から考える時、私の視線はいつもミクロの世界を眺めながら日本の水産業の興隆はもとより研究レベルを国際的に引き上げることが常に視野に入れておられた山田先生の研究者、教育者としての姿勢に帰着する。私は、先生から研究者の社会的責任というようなことについての教えを直接伺ったことはない。しかし、先生の歩まれた道から、基礎的研究分野の仕事をする者であっても、視野は広く持たなければならないという教えを受けたと感じている。そして、いま勤務先の大学で基礎科学充実の重要性を強く認識しつつ、その成果を産学連携の推進にも生かす努力を続けているところである。

いま、国立大学は独立行政法人化という大問題に直面している。各大学は、体質改善を図らなければならないが、私は、結局のところ大学に籍を置く個人々が、自己保身の意識を捨て、広い視野からもう一度大学の社会的責任について熟慮しない限り自ら大学を改革することは出来ないと思っている。山田先生がミクロの世界を眺めつつマクロ的な視点で国あるいは世界を考えておられたように、大学もまたミクロ的な学内の視座から地域社会への貢献、さらには日本という国家に、そして世界の平和のために貢献するマクロの目を持ちたいものである。

山田先生は質実剛健、明治生まれの古武士の雰囲気満ちた気骨ある優れた研究者であった。そして出来の悪い学生には厳しくも暖かであった。その不出来の私が言うには世に稀たるものがあるが、先生のような真摯でスケールの大きな人材を一人でも多く育てることが私の務めであると改めて感じているところである。

(047-8501 小樽市緑3-5-21 小樽商科大学)